

## 貝原益軒における「楽」の領域

清水真裕\*

### 1. はじめに

「楽しい」という感情に関わる様々な事柄は、人間の生にとって大きな意味を持つと考えられる。「楽しい」ことは、少なからぬ人間にとって希求の対象であり、かつ、それは人間を取り巻く様々なつながりや関わり中で生起し、はたらき、評価されている。よって、「楽しい」ことは単に個人の感情の問題ではなく、社会的・倫理的な問題でもある。本発表では、これをある特定の領域に限定されたものとしてではなく、より開かれたものとして位置づけようとする思想について検討する。

さて、そもそも「楽しい」とは何であろうか。これを定義するのは決して容易ではないが、一般的にはどのように把握されているのか、簡単に確認しておきたい。『日本国語大辞典』<sup>1</sup>によれば、「楽しい」とは、人が「ある状態や持続的行為によって欲望・願望などが満たされ、快いさま」を指す。また、成田和信氏は、「楽しさ」<sup>2</sup>を①「特定の心的事象を、それが生じているときに、その心的事象の現象的内容のために、あるいは、それにともなうクオリアのために、好きであったり気に入ったりしている」という事態、②常に、自分の行為のけっか生ずるもの<sup>3</sup>、として分析している。以上、「楽しい」とは、〈ある快いさま〉を指し、また、〈主体の行為によって発生するもの〉という2点を確認しておく。

### 2. 「楽」と領域の問題について

ところで、ルース・ベネディクトは、『菊と刀』において、次のように述べている。

日本人は自己の欲望の満足を罪悪とは考えない。彼らはピューリタンではない。彼らは肉体的快楽をよいもの、涵養に値するものと考えている。快楽は追及され尊重される。しかしながら、快楽は一定の限界内にとどめておかなければならない。快楽は人生の重大な事柄の領域に侵入してはならない。<sup>4</sup>

ここでは、厳しく保たれるべき「人間の主要な義務の世界」と練磨されるべき「気晴らしの世界」<sup>5</sup>という相反する二つの領域が、こともなげに並存している様子、また、前者のために後者がたやすく犠牲にされる様が、驚きをもって語られている。ベネディクトは、日本人にとって「人情」は「人生において低い位置を占めているかぎり、一向にさしつかえないものと考えられて」<sup>6</sup>いること、また、「人間の義務全体が…〔中略〕…明確に区別された幾つかの部分に分けられているように考えられ」、「おのおの世界はそれぞれ特有の、細かに規定された掟をもっている」<sup>7</sup>ことを指摘している。たしかに、我々は、生活の中に「公私の区別」といったごとき、区別された領域が存していることや、そこに「それぞれ特有の」「掟」が働いていることを感じているだろう。その一方で、我々はどうのような領域（所属、境遇、空間、立場）においても、そこに属する在り方が、ある同一の観念、すなわち「楽しい」でもって語られ

\*お茶の水女子大学大学院院生

ている事態をしばしば目にする。実際、この「楽しい」なるものを語ることによって、その者の属する領域について語ろうとする例は枚挙に暇がない。すなわち、「楽しい」は、個としての人間とある領域とを結びつけるひとつの契機として扱われていると考えられる。ときには、その者の性質や適性、信念、理想、誇り、あるいはその領域を推奨する理由までもが、「楽しい」なる観念のもとに表明される。そのような事態のもとでは、人は何を以て「楽しい」とするかが常に問われ、また自省されねばならない。また、それは自然で素直な感情であると前提されるがゆえに、その領域に対する自発的・主体的な参加や関与さえも含意される。ときには「楽しさ」が、ある領域へ自らを拘束するという事態もあり得る。様々な理由により、ある領域における楽しさが成り立たなくなったとき、人はその違和感に苦しむ経験を経て、自分の楽しみや属する領域の転換の必要に迫られることもある。

ここで、ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』<sup>8</sup>における以下のような定義が想起される。ホイジンガは、「遊び」を「ただ楽しみのため」<sup>9</sup>になされるものとしつつ、次のように定義する。

遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である、それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののなかにある。それは緊張と喜びの感情を伴い、またこれは「日常生活」とは、「別のもの」という意識に裏づけられている。<sup>10</sup>

ホイジンガは、「遊び」を「一時的な活動の領域」<sup>11</sup>におけるものとして定義するが、同時にそれを「文化の一つの基礎であり、因子であ」<sup>12</sup>るとする。ここには、先に検討したような、楽しみとある領域との関係性と多くの類似点がみられる。

また、チクセントミハイは、「一つの活動に深

く没入しているので他の何ものも問題とならなくなる状態、その経験それ自体が非常に楽しいので、純粹にそれをするということのために多くの時間や労力を費やすような状態」を「フロー」と名付けている<sup>13</sup>が、これをさまたげる要因は、意識や心理的エネルギーの散乱・混乱、すなわち「心理的エントロピー」であるとしている。それを踏まえ、文化を、そのような意識の散逸を防ぎ、「フロー」を導くための「カオスに対する防衛的な構築物」「防壁」として理解している<sup>14</sup>。つまり、「楽しい」と感じる活動の発生・維持は、元来ある領域と深い関わりをもつものであると捉えることができる。

以上のような示唆から、「楽しさ」は、社会的な意味においても、それが求め得るとされる条件の上でも、領域の問題と切り離しがたい性格を有していると考えられる。

### 3. 普遍的「楽」―貝原益軒の場合

ここまで見てきたように、「楽しさ」は、ある限られた領域に付随して語られる機会が多い。しかし一方で、人間のこの「楽しい」という感情を、ある特定の立場や状態の中に閉じ込めず、より開放された普遍性の高いものとして理解しようと試みる論者も存在する。

たとえば、貝原益軒(1630-1714)は、特にその幅広い経験的学問と民衆向けに著した「訓もの」と呼ばれる著作群によってその名を知られている学者であるが、「楽」を人にとってゆるがせにできないものとしてしばしばこれに言及している。

益軒は、「凡世俗の楽は心を迷はし、身をそこなひ、人をくるしましむ。」<sup>15</sup>とした上で、人間にとってより適切な「楽」とは何かを提唱しようとする。

楽みは人の心に生れつきたる天機にして、本自これあり。されども私欲あれば、耳目口体

の欲にそこなはれ、喜怒哀懼の情におほはれて、この樂を失ふ。君子は情欲にやぶられずして、常にこの樂を失はず。いかなる患難の事にあひても、この天然自有の樂を改めず。又風花雪月の外境にふるれば、心の内にある本然の樂、外物と相和して彌樂しむ。是外物を以て、はじめて樂とするにはあらず。外物来りて本然の樂をたすくるなり。天地の道陰陽の化、四時のめぐりはつねに和氣あり。是天地の樂なり。この樂ただ人にあるのみにあらず、鳶のとび、魚のをどるも、凡禽獸のさへづりなくも、草木のさかえ、花咲、実のるも、みな是天氣の発生する所、万物自然の樂なり。これを以て人の心に、もとより樂あることをしるべし。もし欲にひかれて、この樂をうしなふは、天地の道にそむけり。いかなる横逆にあひ、不幸にあふとも、常に此の樂を失ふべからず。聖人ややもすれば、此樂をとき給ふ。この樂の人に切なることをしるべし。仲尼顔子の樂は、我輩愚者のしるべきことにあらず。ただ愚人にも、各生れつきたる樂あることをしりて、樂を失はざる工夫あるべし。<sup>16</sup>（『大和俗訓』）

まず、益軒は人間としての「樂」が成り立つ場として「天地」を想定する。天地の間は陰陽の氣で満ちており、これは常に和を保ち、「人万物をうみて、又やしなひいかし」ながら流行している。このように気が盛んに動いている様は、その氣が生み出す様々なもの<sup>17</sup>が、各々の性質や特性に従っていきいきと活動している様子に見てとることもでき、それらは「天地の樂」と称される。そのような「樂」は、天地が生み出す存在である人間にも生得的に具わっている。人間にあっても、「樂」はその性質・特性を発揮している状態とされるが、それでは、この人間の性質・特性とは何か。

天地の御めぐみをうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御

心にしたがひ、わが仁心を保ちて、つねに樂しみ、温和慈愛にして情ふかく、人をあはれめぐみ、善を行ふを以て樂とすべし。<sup>18</sup>（『樂訓』）

天地の働きは、「人万物をうみて、又やしなひいか」すことであるが、この天地の〈人・事物を恵み生かすという働き〉は、人間にも付与されている。この働きは、人間にあっては「仁」と呼ばれる。つまり、この「仁」を発揮することが、人間にとっての「樂」であり、また「道」であるとされる。益軒は「樂」について、「別に一物ありて之を樂しむに非ず。若し道を以て樂と為すと謂はば、道と樂と二となり了る。」<sup>19</sup>といい、人間の生き方、あり方としての「道」と「樂」とは別の物事ではないとする。「樂」は、しばしば聖人たちも説き、そのことによっても人間にとって切実なものであると理解されるべきとする。

では、この「道」に則って生きるための具体的な方法は何か。最も重要な事は、先に上げたような〈人・事物を恵み生かすという働き〉、すなわち「仁」を充実させることである。それにより、私欲や情を抑え、様々な状況において慎んで心を落ち着かせ、人間関係の中で和を保つよう心掛け、「樂」を失わないようにする。また、「外物」によって、この「樂」が助けられることもある。「外物」は、過度に依存すれば身をそこない「苦」の原因となるが、うまく用いれば、人間生来の「樂」の助けとなる。以上のような「樂」は、時、場所、身分、貧富に関わらず、多くの人々に開放されている「樂」であると益軒は考えている。

#### 4. 普遍的「樂」—中江藤樹の場合

ところで、普遍性をもって人間の「樂」を規定しようとする態度は、益軒にのみ見られるものではない。たとえば、中江藤樹（1608-1648）もまた、同じように、人間にとって「樂」を最も重要なものと位置づける学者であるが、その位置づけ方は、

益軒のそれとは異なっている。

藤樹は、その著書の中で、「楽」について次のように述べている。

問曰、人間世、第一にねがひもとむべきものは何事ぞや。

答云、心の安楽に極れり。

問いわく、苦を去て楽を求る道はいかん。

答云、学問なり。

問云、学問にて苦痛を除き、安楽を得道理はいかが。

答云、元来吾人の心の本体は安楽なるものなり。其の証拠は孩提より五六歳までの心を見ればし。世俗も幼童の苦悩なきを見ては仏なりなどいへり。かくのごとく心の本体は安楽にして苦痛なきものなり。苦痛は只人々の惑（まよひ）にてみづから作る病なり。心はたとへば眼のごとし。眼の本体はたてあけ自由にして物を見ること分明快活なり。もし塵砂など目の内へ入るときは、たてあけ自由ならず、物を見ることも明かならず、苦痛こらへがたし。一旦苦痛こらへがたしといへども、塵砂を除去ときは、本体にかへりて開閉自由にして、分明快活なり。其のごとく心の本体は元来安楽なれども、惑の塵砂にて種々の苦痛こらへがたし。学問はその塵砂をあらひすて、本体の安楽にかへる道なる故に、学問をよくつとめ工夫受容すれば本の心の安楽にかへる。<sup>20</sup>（『翁問答』）

藤樹は、「楽」を、誰しもが具える「心の本体」<sup>21</sup>であると考えている。人間は、学問をして「惑」を除くことにより、「眼」の「塵砂」に例えられる苦悩を取り除き、「心の本体」である「楽」を顕現させることができるとする。このように、藤樹もまた、「楽」を人間の「心の本体」とすることで、普遍性のあるものとして捉えようとしている。

このように、益軒・藤樹の両者は、本来的に誰に対しても、限られた領域を超えて「楽」は開放

されているとする点、また、「楽」は「天」の与える「道」を学ぶことによってもたらされるとする点、「楽」は自己を苦しめる欲望とは相容れないものとする点等において共通している。しかし一方、藤樹は、自身の「楽」観念を指してしばしば「独楽」という語を用いている。「独楽」は、「楽」の「位二在ラズ、物二在ラズ、生二在ラズ、死二在ラズ、人二求メズ」<sup>22</sup>、つまり、何者にも依存せず存在している性質を強調する語である。かつ、それは「常住不滅」であり、「一貫」、すなわち、天地万物を貫いて存在している永遠不変の唯一の原理と同一であるとされる。これが「独楽」であり、人間の「心の本体」である。つまり、藤樹は人間を本来的・絶対的に〈「楽」という状態・有り様として存在しているもの〉として規定することで、これに無限定性をもたせようとしているのである<sup>23</sup>。

## 5. おわりに—益軒における「楽」の領域

益軒は、〈人間は楽しむことが可能である〉、〈人間は誰しも楽しむものである〉という意味で「楽」を普遍的なものと捉えようとしている。益軒は、人間の行いや「楽」を、「鳶のとび、魚のをどるも、凡禽獣のさへづりなくも」といった、諸々の生物の活動に比している。すなわち、「楽」とは「楽しむ」、すなわち人の活動それ自体、または、それによって「楽しい」という感情を得ることを指している。「楽みは生れつきたる天機にして、本自これあり」<sup>24</sup>とは、このような人間の「楽しむ」という能力、また、それを行おうとする人間の性質について語っているのである。その意味で、益軒にとっては、「楽」は、必ずしも絶対的に固定化されたものだとはいえない。益軒は、「学ばざる人は、内に在る楽を知らず、又外なる楽を空しくす。内外両ながら失へり。」<sup>25</sup>といい、「楽」について理解しなければ、それらが失われる可能性があるとも説いている。

およそ人の心に、天地よりうけ得たる太和の元気あり。是人のいける理なり。草木の発生してやまざるが如く、つねにわが心の内にて、機のいきてやはらぎ、よるこべるいきほひのやまざるものあり。是を名づけて楽と云。是人の生理なれば、即是仁の理なり。<sup>26</sup> (『楽訓』)

夫れ人の一身心固より主と為り、而して気専ら事を用ふ。故に七情、思慮、視聽言動、皆気の成す所、之を養ふに節を以てせざるべからず。若しその気を暴へば、其の道を失へりと為す。故に温恭和平にして以て気を養ふ。是即ち心を養ふ所以、而して心を養ふと気を養ふと、二事にあらざるなり。<sup>27</sup> (『慎思録』)

周知のように、益軒は『大疑録』において、理気一元論の立場をとっている<sup>28</sup>。すなわち、「理」や「道」とは気の動く条理とそのあり様を指した語であり、それらは気と別に存在するものではないとする。よって、人間の「道」である「楽しむ」という活動・能力の存亡もまた、気の在り様に関わるのである。また、「楽しむ」ことの主体である心は、気が充たされていなければ適切に活動することはできない。なぜなら、人間の全ての活動や思慮、意志、感情は、もともと気の働きだからである。

そのため、益軒は切実に、自己の気を養って充たし、これを穏やかにめぐらせることの重要性・有効性を主張する<sup>29</sup>。また、対外的な場面においても、気を乱さぬように心掛けるほか、「外境潔ければ、中心も亦是にふれて清くなる」<sup>30</sup>、「外物の養をかりて内の楽をたすくる」<sup>31</sup>として、感受性を高めて己を取り巻く世界をあらためて観じ、気のコントロールにふさわしい領域をみずから作り上げ、そこに身を置くことの有効性も説く。たとえば、外境に触れたり、「旅行して他郷にあそ」<sup>32</sup>んだり、「つねに居る処」<sup>33</sup>の環境を整えたりするがごときである。それは、一面から見

て「益軒の自足と内向の性格」<sup>34</sup>と指摘されうるものではあるが、これは、「楽しむ」ためには自らその条件を整える必要がある、また、整えることが可能であるとの考えに基づいている。天地という無制限の領域のもと、普遍的に「楽しむ」性質・能力をもつ人間は、「楽」についての意識を省み、これを目指す主体として、常に己の状況に応じた行動・工夫をする態度が求められると益軒は考えているのである。

## 注

- 1 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典 第2版』(小学館、2001)。
- 2 同上書によれば、「たのしさ」とは「形容詞たのしいの語幹に接頭語「さ」がついたもの」。
- 3 成田和信「快さと楽しさ」(『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』25、2010、1-29頁)。
- 4 Ruth Benedict, *THE CHRYSANTHEMUM AND THE SWORD*, Boston : Houghton Mifflin Company, 1967 (長谷川松治訳『菊と刀—日本文化の型』、現代教養文庫・社会思想社:東京、1967、204頁)。ここで「快樂」の例として挙げられているのは、「温浴」、「睡眠」、「ものを食うこと」、「ロマンチックな恋愛」、「同性愛」、「自淫的享楽」、「酒に酔うこと」等。
- 5 同上、212頁。
- 6 同上、211頁。
- 7 同上、224頁。
- 8 Johan Huizinga, *Vom Ursprung der Kultur im Spiel*, Rowohlt's deutsche Enzyklopädie 21, Rowohlt's Verlag, 1956 (高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央文庫、1973)。
- 9 同上、31頁。
- 10 同上、73頁。
- 11 同上、31頁。
- 12 同上、25頁。
- 13 Mihaly Csikszentmihalyi, *Flow: The Psychology of Optimal Experience*. New York: Harper and Row, 1990 (今村浩明訳『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社、1996、5頁)。
- 14 同上、103頁。文化について次のように述べる。「存在が仕掛けて来る挑戦に我々が取り組む手助けをする規範を規定し、目標を発展させ、信念を築く。そのことによって文化は、これらにそぐわない他の多くの目標や信念を排除せねばならず、したがって可能性を限定する。しかし、この制限された目

- 標や手段への注意の誘導が、文化が設定した境界内での行為を容易にするのである。』。
- 15 貝原益軒『楽訓』卷之上（益軒会編『益軒全集卷之三』益軒全集刊行部、1910-1911、610頁）以下、『益軒全集三』、610頁）と記す。「世俗の楽」について、より具体的には、『家道訓』（『益軒全集三』、459頁）に次のようにある。「無益の芸をこのみ、淫楽をこのみ、衣服のかざりをこのみ、美味をこのみ、饗応をこのみ、管作をこのみ、無用の器をこのむ。』。
- 16 『大和俗訓』卷之四（『益軒全集三』、105-106頁）。
- 17 『大疑録』卷之下（『益軒全集二』、168頁）に、「天の気一たび地に著けば、形を成す。人物これなり。山川草木、禽獸虫魚、霜雪雨露に至るまで、みな然り。』。
- 18 『楽訓』卷之上（『益軒全集三』、607頁）。
- 19 『慎思録』卷之二（『益軒全集二』、22頁）。
- 20 『翁問答』（『藤樹先生全集 第二冊』、岩波書店、1940、292頁）。以下、『藤樹全集二』と記す。
- 21 「楽」を「心の本体」とする説は『伝習録』に見える。（宇野哲人・安岡正篤監修『陽明学大系第二卷 王陽明 上』明德出版社、1972、219-220頁）参照。
- 22 『雑著』（『藤樹全集三』、225頁）。
- 23 なお、厳密に言えば、「独楽」それ自体は境地、すなわち領域としても捉え得るものである。「独楽」は『雑著』（『藤樹全集三』、225頁）に「学ビテ這裡二入ラズバ、則チ以テ学ト為スニ足ラザル也。」と表現されている。
- 24 『大和俗訓』卷之四（『益軒全集三』、105頁）。
- 25 『楽訓』卷之上（『益軒全集三』、607頁）。
- 26 同上、606-607頁。
- 27 『慎思録』卷之一（『益軒全集二』、3頁）。
- 28 『大疑録』卷之下（『益軒全集二』、174頁）に、「それ天地の間は、すべてこれ一気にして、その動静を以てすれば、これを称して、陰陽となし…〔中略〕…これを道と謂ふ。その条理ありて乱れざるを以て、又これを理と謂ふ。指す所同じからざるによりて、姑くその名を異にすといへども、然もその実は、みな一物のみ。ここを以て陰陽流行して純正なるものは、即ちこれ道なり。故に理と気とは、決ずこれ一物にして、分つて二物となすべからず。然れば則ち、気のなき理なく、又理なきの気なく、先後を分つべからず。いやしくも気なくんば、何の理かこれあらん。これ理と気の分つて二となすべからず、かつ先に理ありて後に気ありと言ふべからざる所以なり。』。
- 29 『養生訓』卷之一（『益軒全集三』、485頁）に養生の根本について述べられている。「生を養ふ道は、元気を保つを本とす。元気を保つ道二あり。まづ元気を害する物を去り、又、元気を養ふべし。元気を害する物は内欲と外邪となり。すでに元気を害する物を去らば、飲食動静に心を用いて、元気を養ふべし……気をそこなふ事なくして養ふ事を多くす。是養生の要なり。』。
- 30 『養生訓』卷之二（『益軒全集三』、506頁）。
- 31 『楽訓』卷之上（『益軒全集三』、606-607頁）。
- 32 同上、（『益軒全集三』、616頁）。
- 33 例えば、『養生訓』卷之五（『益軒全集三』、536頁）に、次のようにある。「つねに居る処は、南に向かひ戸に近く、明なるべし、陰鬱にしてくらき處に常に居るべからず。気をふさぐ。又かゞやき過ぎたる陽明の処も、つねに居ては精神をうばふ。陰陽の中になかひ、明暗相半すべし。甚明るければ御簾をおそり、くられれば御簾をかかぐべし。』。
- 34 横山俊夫「達人への道—『楽訓』を読む」（横山俊夫編『貝原益軒—天地和楽の文明学』平凡社、1995）。特に「二 人生を一〇倍にする術」「三七美の国のわが家こそ」参照。